

主 題：働きの機会

聖書箇所：マタイの福音書 25章14 - 30節

イエスは弟子たちに「世の終わり」について語りました。この時代にあって神に忠実に生きることの大切さを教えるのです。そのことが記されているのが、マタイ24, 25章です。イエスは弟子たちに世の終わりが近づいているのだから「主に会う備えをする」ことを教えます。それは、世の終わり、すなわち、イエス・キリストがこの世に帰って来られ、罪人へのさばきが下る日が近いのに、まだ平気で神に逆らい、罪を犯している人々が多いからです。これは、この世だけの問題ではなく、教会においても言えることです。教会にも「主に会う備えができていない人」が多くいるのです。救われていると思っているけれど、実はそうではない人です。

あの大説教者のスポルジョンは彼の教会についてこのようなことを言いました。「教会員の中で本当に救われているのは60%くらいだ」と。また、救われていても信仰生活において怠慢な人も見られます。私たちは「自分の救い」や、また「自分の信仰生活」について真剣に吟味する必要があるのではないのでしょうか？25章では、主に会う備えができていないと思っていながら、実はそうでなかった人たちがいることを教えています。

☆「主に会う備えができた生き方」とはどういう生き方か

25章から二つのたとえを見ましょう。

1 - 1節では、「ともしびを携えて花婿を出迎える10人の娘たち」のたとえが記されています。10人とも花婿を待っていました。しかし、そのうちの5人は油を用意していなかったため、それを買に行っている間に花婿が来てしまったのです。このたとえは、この5人は救われていなかったため、花婿なる主が来たときに祝福に招き入れられなかった、という話です。

また、続く14 - 30節は、「主人の財産を預かった三人のしもべたち」のたとえです。ここでも、大切な救いについて、そして、本当の信仰者の歩みとはどういうものなのかを教えています。イエスは、一人一人「主に会う備え」をするようにと私たちを励ますのです。

14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』

23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。

主人が旅に出かける前に信頼できる三人のしもべを呼んで、彼らに財産を託します。そして、旅から

戻って来たときにそれぞれの忠実さに応じて報いを与えるのです。この「主人」とはイエスのことを指しています。主人が旅に出て「留守の期間」とはイエスの昇天から地上へ帰って来られる地上再臨のときまでです。そして「しもべ」とは信じていると告白している信者たちを指します。この時代に住むすべての告白している「信者たち」に対して、忠実に主に仕えることの大切さを教えているのです。

もう少し詳しく見ましょう。このたとえは「天の御国」についても教えています。そこに入れる人と入れない人がいます。「天の御国」とは、「神の国」と同義語です。神の支配、神の王としての権威を意味します。そこに入るには「新生」が必要です。ヨハネの福音書3：3に「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」とある通りです。そして、新生は罪の支配からの救いを意味します。コロサイ1：13「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」と、罪から救い出されることにより、この「天の御国」に入れるということです。

そこで、マタイ13章を見てください。イエスは「天の御国」に関して多くのたとえで語っておられます。

13：31からし種のたとえ＝成長すること

33？パン種 〃＝全体がふくらむ、変化すること

44？畑に隠された宝＝価値あるもの

45？良い真珠を捜している商人＝値うちのあるもの

ところが、24 - 30節の「良い麦と毒麦」、47 - 50節の「地引き網」のたとえはこれらと異なっています。

24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。26 麦が芽生え、やがて実ったとき、毒麦も現われた。27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』29 だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』」

47 また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。48 網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」

「天の御国」に良い麦と悪い麦とが蒔かれて、その収穫の時にそれらが分けられ、悪い麦は火の中に投げ込まれると言います。また、「地引き網」のたとえでも、良い魚と悪い魚とが分けられ、悪い方は捨てられるとあります。ということは、違った「天の御国」がイエスによって教えられていることが明らかです。救われた人たちだけを指した「天の御国」と、救われていない人たちが含まれる「天の御国」です。この25章においてイエスは、後者の、どちらの人たちも含まれる「天の御国」について教えています。それは、すべて「そこで泣いて歯ぎしりするのです」（25：30、13：42、50）とあるからです。これはどういう意味でしょう？「慰めることのできない悲しみ、軽減・赦されることのない苦しみ」を教えるのです。13：42、50と24：51では永遠のさばきの場所＝地獄のこととして記されています。故に、ある人々は永遠の滅びへと向かうのだと言われています。

どうすればそれを見分けることができるのか、どうすれば自分が間違いなく救いに与っていることがわかるのでしょうか？その本当のキリスト者とそうでない者が含まれている「天の御国」に属する者たちに対して、イエスは次のことを教えておられます。

A. 私たちの責任

B. 私たちの選択

C. 私たちの報い

これらを順に学んで行きましょう。

☆「天の御国」に属する者について

A. 私たちの責任 14 - 15節

それは「自分のすべてをもって主に仕えること」です。

14節「しもべたちを呼んで、自分の財産を預ける」

15節「彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには5タラント、ひとりには2タラント、もうひとりには1タラントを渡した」

神から大切な務めが与えられている

「タラント」とは重さです。また、貨幣の単位でもありました。1タラントは6000デナリで、1デナリとは自由労働者またはローマの兵卒の1日分の給料です。6000日分の給料、約20年分です。しかし、ここでは「金額」を強調しているではありません。それは、神から託された務め、責任です。それをどのように用いるかです。主から託されたすべてのものを主のために用いる機会、神から与えられた能力や賜物、持ち物を用いることです。

主の財産が与えられた

主人である神のものが託されたのです。自分のものではないから自分のためには用いないし、用いてはならないのです。神のために用いる責任があるのです。

可能なことが与えられた

「おのおのその能力に応じて」とは、無理なこと、できない働き、務めは与えられていない、可能なことが与えられたということです。神のご配慮です。神の助けによってできることです。パウロは言います。Iテモテ1:12-13「12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」、彼は自分の人生そのものはキリストご自身のものだといいます。パウロはすべてを神のために、神に喜んでいただくためにと生きたのです。また、ピリピ1:20-21でも「20 それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と言っています。パウロの唯一の希望、生きる唯一の目的、唯一の生きがい、それはすべてのことを神に喜んでいただくために為すことでした。

B. 私たちの選択 16-18節、24-25節

二つの選択があります。忠実か、不忠実かです。

忠実 16, 17節

「16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。」

「すぐに行って」の「すぐに(副詞)」は救われている人の反応です。これは大切なことです。即座の行動です。「ハイ、わかりました」と反応するのです。5タラント、2タラント与えられた者は、

●なぜ、このように行動できたのでしょうか?その理由は、

(1) 主に仕えることは特権であることを知っている

Iテモテ1:12, 13を見てください(前記)。また、使徒20:22-24では「22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っているとされることです。

24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と言っています。これがパウロの選択でした。私の責任は主に忠実に仕えることだと。

(2) 時間に限りがあることを知っている

「すぐに」と時間を無駄にしないのです。主人がいつ帰ってくるかを知っていたからです。

(3) 忍耐が必要であることを知っている

19節に「よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、」とあります。「よほどたってから」はかなりの時間が経っていたことを示します。

彼らは自分の責任、務めをよく知っており、それがどれほどすばらしいものか、罪深い自分にはもったいないことであることがわかっているのです。この「忠実さ」というものが救われた人の特徴です。神に従うことを決心したこと、それが「救い」です。「神に従いたい」「神に喜ばれたい」という思いなどまったく持っていなかった者が、そのような思い、願いを持つ者へと神が変えてくださる、それが福音の力、神の力であり、神の救いなのです。「忠実に歩むことにより救われる」と言っているのでは

ありません。救われた者は「忠実に歩みたいと思う者たちである」と言っているのです。神に逆らうことを常に選択してきた者が救われたことによって変えられるのです。どんなときも主に忠実であるのは、救われた者になされる神のわざなのです。ローマ1：16「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」救われているはずのその人の心には「主に従って行きたい」思いがあるはずで、もしないなら、その信仰を吟味するべきです。

2) 不忠実 24 - 25節

不忠実を選択した者、不信仰の信者ともいえます。どうしてそのように言えるのでしょうか？

彼らは、

(1) 主人のことを知らない 24節

「ひどい方」＝「蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集める」と言います。神はひどい、自分のことしか考えておられない、私たちを苦しめて、おいしいところを取るお方だということです。貪欲な人、人の収益をくいものにする人だと。この「ひどい」とは「厳しい、厳格な人の性格を表わします。これが彼の主人観＝神観でした。間違った神観はその人の心の状態を明らかにします。

(2) 自分に与えられた務め、責任が神からの特権、恵みであると思っていない

彼は主人にねたましい思いを抱きます。一生懸命働いても自分にはそれほどの儲けはない、それでも働くべきか？働かなければひどい目に会うと、彼には働く意欲も喜びもありません。したがって、感謝も生まれてきません。彼は悪意に満ちて預かったものをそのまま返すのです。

(3) 失敗の恐れをもっている 25節

「私はこわくなり、」と、もし成功しなかったら主人に怒られるからしないほうがいいと、失敗した時のこと、失敗することを恐れるのです。

(4) 人との比較からくるねたまみがある

自分には他の人より与えられたものが少ないという不満です。

(5) 今のことだけしか考えない

神による精算の日が来ることなど考えないのです。自分の怠慢さに対して何も起こらない、神のさばきはない、と思っているのです。

(6) 自分自身に自信がある

自分は大丈夫だと思っています。1タラントを隠すこと、それは間違っていない、すなわち、自分がしていることは悪いこととも、間違っているとも思わないのです。神が命じることと違っていても自分は正しいと確信しているのです。

彼は神がどう見られるかに気づくべきです。神の命じることを拒んでいるのはその人の選択なのです。

C. 私たちの報い 19 - 30節

主の祝福

(a) 天の御国＝主とともに永遠を過ごします。

(b) より大きな働きと責任が与えられました。

報いは、天において恵まれた奉仕が与えられることです。黙示録22：3「もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、」と、天において永遠に主に仕えるのです。シェーフアーは言います。『恐らく地上での忠実な奉仕は、天上での恵まれた奉仕の場によって報われるであろう。黙示録22：3によれば、「そのしもべたちは神に仕え」とある。信者たちは、彼らを愛し彼らのためにご自身を与えてくださった救い主に愛の奉仕をすることのうちに、最高の目的達成を見いだすのであろう』と。本当のキリスト者にとっては、主に仕えることが喜びであるはずで、主に仕えることによって大きな喜びがもたらされるのです。

私たちが主の祝福をいただく基準は＝神から「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と言われることです。いくら儲けたかが祝福の基準ではないのです。それは、どのようなすばらしい働きをするかによって決まるわけではありません。これだけの働きをしているから、また、してきたから、ではないのです。神への「忠実さ」です。神のみことばに対して忠実であるかどうかなのです。日々、自分のなすべきことをしているかどうか、神のみことばに従うことを自分の最大の喜びとしているかどうかです。

主ののろい 26 - 30節

「悪いなまけ者のしもべだ」と言われています。無益な者だという意味です。主からのほうびはありません。彼は失敗を恐れ、責任を主人のせいにしていきます。

彼らがさばかれる理由は？

(1) 「悪いしもべ」 26節

「邪悪な」という意味です。神を知らない、信じていないのです。悪の虜になっているのです。

(2) 「なまけ者のしもべ」 26節

自分の怠慢さに気づかず、それに対して何も起こらない、神のさばきなどないと思っています。

(3) 役に立たぬしもべ」 30節

「無益な、役に立たない」と言われます。

彼らのその報いは？

祝福を逃す

永遠のさばき

彼らは自分の責任と自分に課せられた職務を果たすという義務を見逃したのです。ユダ15にはこのように書かれています。「すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」

「主に会う備えをしている人」＝それは日々主に対して忠実に生きている人です。私たちに今日、その機会が与えられています。私を用いてくださいと願うことです。時間を無駄にしないで。